

嵐の夜

小川未明

青空文庫

父さんは海へ、母さんは山へ、
あきびより 秋日和の麗わしい日に働きに

出掛けて、後には今年八歳になる女の子が留守居をしていました。

もとより貧しい家で、山の麓ふもとの小高い所に建っている一軒家で、

三毛猫のまりと遊んで父さんや、母さんの帰るのを楽しみに遊ん

でいました。見渡す限り畑はたや圃はたけは黄金色に色づいて、家の裏表に

植うわつている柿や、栗の樹の葉は黄色になって、ひらひらと秋風に

揺れています。うす雲の間から、洩もれる弱い日影は、藁葺屋根わらぶきやねの

上に照つて、静かな、長閑のどかな天気でありました。やがて大暴風雨おおあらし

のする模様などは見えませんでした。栗林には人の声が聞えて、

山やまがら雀を捕りに来たのでありましょう、鳥籠に山雀が二羽も三羽

も入ってばたばたするのを下げながらもち竿を片手に持つて、二人の男の子が口笛を鳴らしながら、がさがさと落葉を踏んであちらへ行きました。またあちらの松林には茸たけがり狩ひとの男女が、白地の手拭てぬぐいを被つて、話し合いながらその姿が見えたり、隠れたりしています。また遙か田圃たんぼの方では、鎌の打ち振るたびにちらちらと光つて、早稲わせを刈っている百姓の影も見えます。少女おとめは紫色に鉄漿かねを染めた栗の実や赤く色づいた柿の実を筵むしろの上に乱して、まりと一しよに何心地なく遊んでいます。

少女の名はかねと云いました。母さんや、父さんの帰るを待つているのであります。午ひるすぎ後の天気は、そよそよと萩や、柿の葉を鳴らす風の少しあるばかりで、日本晴れのした好い日和であり

ました。

少女はもはや遊びに飽きてまりを抱いて、裏庭から細道を辿りながら、二三町も行きますと藪やぶになっていて、土手の両方しきみには櫛すずなりの赤い実が鈴かや生そよになつていて、萱かやの繁つて、白い尾花の戦そよいでいるだらだら坂になります。そのだらだら坂を下りますと、すぐ前に青々として目の醒めそうな日本海の波は、ど、どん、どどんと足あしもと許もとまで、打ち寄せる浜辺に出るのであります。少女は三毛を抱いて、海辺へ来ました。でうろついてやがて獵師の沢山に住んでいる村に着きますと自分の顔を知つて、真黒く日に焼けた男がこつちを見て笑つています。少女は殆ほとんど毎日のようにこの辺あたりまで遊びに来るのであります。低い、小さな破れた家が幾軒

となく並んでいて前には沙すなの上に鯛や、鯖や、その他いろいろの
小魚を乾しているのです。まりは魚臭い匂いを嗅ぎつけて、しき
りに鼻をひくひくやつて、にやあにやあと鳴きだしました。けれ
ど少女は「まりや降りしてはいけないよ。」といって、しつかと
抱き締めて、さっさと広々とした沙原すなはらの方へ切れた草履ぞうりをひき
ずつて、歩んで行きかけますと、遠くの沖の方を往来ゆききします白帆
の影が見えます。

足許まで、打ち寄せる雄波おなみ、雌波めなみは、「かねちゃん、かねちゃ
ん、やー。」といって転がるように笑いさざめく。真青な空！

真青な海！ 白い鷗かもめがふわふわと飛んでいる。ああ、はればれと
したお天気で気持のいいこと。かねちゃんは、涼しい眸めを見張っ

て、父さんの、今朝出て行きました、沖の方を眺めていました。「ああ、父さんが恋しいことよ。」と、ほろりとして涙が頬を伝ったのであります。ひたひたと破れた衣の裾を吹く、沖の風は身に浸みて寒い。小猫は懐裡ふところに抱かれたままで、ごろごろうなっています。

かねちゃんも、家へ帰っても、まだ母さんは帰って来ませんでした。柿の木の下に、敷いた筵の上は、栗の林に遮さえぎられて、今は日の光りも蔭かげつて、木の葉や、草の葉の上に風がさわさわと鳴り、にわかには、いつの間にやら大空に白雲がちらばったのであります。その内に天地は暗くなって、風が烈しくなつて、栗の樹や、柿の木や、松林に鳴る音高く、萩の枝などは、もまれにもまれて、見

渡すかぎり田畑は一面に白っぽく、稲や、芋の葉のひらひらとなびくのであります。

かねちゃんは、小窓の内から外の方を見て、母さんが帰って来ないかと見ていますと、木の葉が空に吹かれて、舞い上ってはちらちらと降るように落ちるのであります。

そのうちに雨も加わって、木の枝の折れる音やら、海の波の音がごうごうと吼ほえるように、今にも自分の家が吹き飛ばされそうになりました。かねちゃんは、

「父さん、父さん早く帰って来て頂戴よ——くしんくしん。」
…と泣き出しました。すると雨風に打たれて、圃の細道を走って、濡ぬれぬずみ鼠ねずみのようになって入って来たのは母親であります。

「かねちゃんかねちゃん今帰って来てよ。」

と、表戸を開けますと颯さつと風が中に吹き込んで、木の葉が座敷の中まで飛び込みました。

「まあ、ひどい風なことねえ。」と行って、泣いているかねちゃんを自分の傍に引き寄せて、妾あたしの身体は濡れていてよ、と温かい唇くちをかねちゃんの薔薇色の頬ほっぺ辺たにあてて、

「お父さんはどうしたでしょう……妾おとな浜まで行って見て来るから従順おとなしうしておいでよ、よ、じきにね、晩ほんがた方たまでには帰って来るから。……さあさあ、泣かんで、お留守居留守しておくれよ。

ああ、心配でならないこと。沖はどないに荒れているか……浜たよりへ行ったら消息があるかもしれない。……父さんを、かねちゃん……

…かねちゃん、見に行つて来てよ。」

泣くかねちゃんを家に残して、母さんは、またも雨風の中に駆け出しました。

破れた小窓の障子をブーム、ブームと風が鳴らして、夜はぼつたりと暮れてしまいましたけれど、母さんも、父さんも帰つて来ません…：かねちゃんは、暗がりのまんまで、懷裡にはなにも知らずに眠っているまりを抱いたまましくしくと泣きあかしています。ただ物凄い風の音と、木の葉がぱらぱらと窓や、壁板したみに当つて散り敷く音を聞くばかりで、誰とて自分の家を訪ねて呉れるものがあります。かねちゃんは、泣きあぐんで、少し気がつか勞れて、火もない囲炉裏いろりの傍で、まりの温かいむくむくとした毛の中に可

愛らしい頬を埋めて、居眠りをしたのであります。

その時、誰やら、ことごとと戸を叩くものがありました。かねちゃんは知らずに眠ねています。またことごとと叩くものがあります。かねちゃんはやつと眼を醒ましますと、一人の白い髭ひげのあるお爺じいさんが、目の前に提ちよう燈ちんを点つけて入つつて来ましました。そして黙もつて、手招てぎましますもんですから、かねちゃんは猫を抱かいたままで、お爺さんの傍へ怖る怖る参りますとお爺さんは、柔和にこやかに笑顔を見せて、黙もつて、手招てぎまして来まい来まいと言うのであります。かねちゃんはいつしか、お爺さんに連れられてちようど夢心地で、歩いていきますと、いつのまにやら海辺へ来たと見えて、波の音がどんどんと岸を打うつのが暗やみのうちうちに聞きかれました。

かねちゃんは、お爺さんの後あとについて余程歩いたかと思う時分に、だんだんお爺さんの歩みが早くなったようで、かねちゃんは一生懸命に追い付こうと思つて駆け出しましたけれどだんだん遠く遠くなつて、提燈あかりの火が小さくなるばかりであります。もはや堪こたえきれなくなつて、泣き出そうとしました時、お爺さんの身の辺まわりから鬼火のようなものが、とろとろと燃え上りましたかと思うと、もはや消えて真暗まっくらやみになつて、身体がだるくなつて、とうとう眠てしまいました。

あくる日の朝、目をぱつちりあけて見ますと、破こわれた船の中に自分は眠っていて、まりも枕まくら頭もとでごろごろついています。その傍に父さんも母さんも無事で、自分の方を見て、今お起きか

と目元で笑っていないさる。真まっ蒼さおな海には、白帆の影が見えて、
薔薇色の朝日が見事に昇って、沖の方が輝いています。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「小川未明作品集 第1巻」大日本雄弁会講談社
1954（昭和29）年

初出：「宗教界」

1906（明治39）年11月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

嵐の夜

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>